

第5節 光構内の立会調査

1 教育学部附属光小学校遊器具移設に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 昭和63年5月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約10㎡

調査結果 調査地区は、附属小学校グラウンド南端のほぼ中央部にあたる。

工事内容は遊器具を移設する際に、最高、現地表面より100cmの掘削を行なうものである。既往の調査結果をうけて、包含層の有無・分布範囲、土層の堆積状況の把握を主眼に調査を行なった。調査地点は4箇所であるが、隣接し、約10mの幅におさまる。基本層序は、まず、埋め土があり、その下現地表下16～34cmで暗黒褐色砂層、現地表下32～65cmで黄褐色砂層（漸移層）、そして、現地表下50～76cmで遺物を含む明黄褐色砂層の堆積がみられた。明黄褐色砂層の出土遺物はさほど多くないが、土師器、陶器、磁器片があり、ほとんどが近・現代の所産と考えられる。また、この遺物包含層は各地点で検出までの深さにばらつきがみられ、この周辺は攪乱（削平）を受けているものと考えられる。なお、黒褐色砂層は調査地点の西側で若干粘性をもっており、調査地点付近の土層が一様でないことを示している。最終的には少なくとも現地表下130cmまで、明黄褐色砂層の堆積が続く

ことを確認した。

ところで、光構内では昭和40年、附属中学校体育館新営時、縄文土器、土師器、須恵器が出土し、黒褐色海成砂礫の遺物包含層が確認されている¹⁾。また昭和61年の附属小学校創立記念事業に伴う調査では、黄褐色海成砂の遺物包含層が確認され、須恵器、歴史時代土師器が出土している²⁾。今回、明黄褐色砂の遺物包含層が確認されたが、出土遺物、堆積層の色調からは、昭和61年に確認された包含層と同一層の可能性が高い。また、第2層目に当たる暗黒褐色砂層は昭和40年調査時

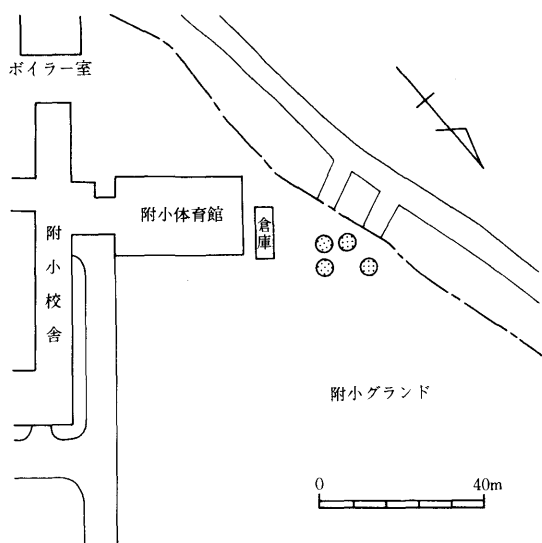


Fig. 16 調査区位置図

の包含層に類似するが、出土遺物もなく、その比較検討資料の少なさから、これ以上の言及はできない。いずれにせよ、今回の調査地点を含めた附属学校敷地内においては、縄文時代～近世の遺物ならびに、2枚以上の遺物包含層が確認されており、今後は、特に遺物包含層の対比という点から詳細な土層堆積状況の把握が課題であろう。

以下、調査期間中に御手洗湾で多量の遺物を表採したので、紹介したい。

出土・表採遺物 (Fig. 17, PL. 4)

1は磁器の碗。垂直に立つ断面三角形の高台をもち、外底面、高台の内側は無施釉。内面の見込み部分には、青色の呉須による草花文を施文する。素地は白色、釉は透明。第3層(明黄褐色砂層)出土。2は土師器の皿。糸切り底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終わる。風化著しく調整不明。胎土、焼成良好で、外面はにぶい橙色(Hue5YR6/3)、内面は灰褐色(Hue7.5YR6/2)を呈する。3は土師質土器の鼎ないしは鍋。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口縁端部は丸い。内外面とも横ナデ仕上げで、淡橙色(Hue5YR8/4)を呈する。胎土、焼成は良好で、胎土には金雲母を含む。2・3とも採集遺物。

ほかに採集遺物には、土師器、歴史時代土師器坏、台付皿、土師質土器甕、陶器甕など22点がある。いずれもローリングによる摩滅が激しく、図化はできない。一部、古墳時代に遡るものも含まれるが、大半が中～近世に属するものである。

(木村)

[注]

- 1) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

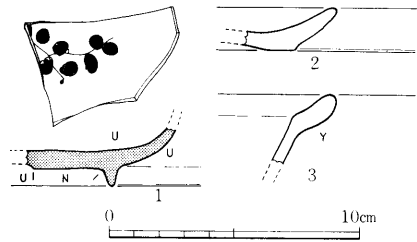


Fig. 17 出土・採集遺物実測図

2 教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 昭和63年8月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 0.5㎡

調査結果 工事は屋外スピーカー設置に伴う鉄柱の埋設のため、現地表面から100cmの掘削を行なうものである。土層の堆積状況は、現地表下85cmまでは10cm程度の角礫を多量に含む攪乱土で、その下の工事基底面までは、1～2cmの円礫を含む褐色（Hue10YR4/4）の砂層が堆積していた。この堆積層からの出土遺物はないが、昭和40年、附属中学校体育館新営時に検出された、縄文土器、土師器、須恵器などを含む黒褐色海成砂礫の遺物包含層¹⁾に相当するものと考えられる。

なお、調査期間中に同構内の面する御手洗湾で、古墳～江戸時代の遺物約60点を採集したので、以下に紹介したい。遺物は現存する護岸用の石垣が組まれる前に、同構内に堆積、露出していた遺物包含層が波濤によって削られ、遺物が遊離したものである。海浜部の²⁾ほぼ全面に散布しており、過去にも弥生～江戸時代の遺物が多量に採集されている。

表採遺物 (Fig. 19, PL. 4・5)

土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器などがある。

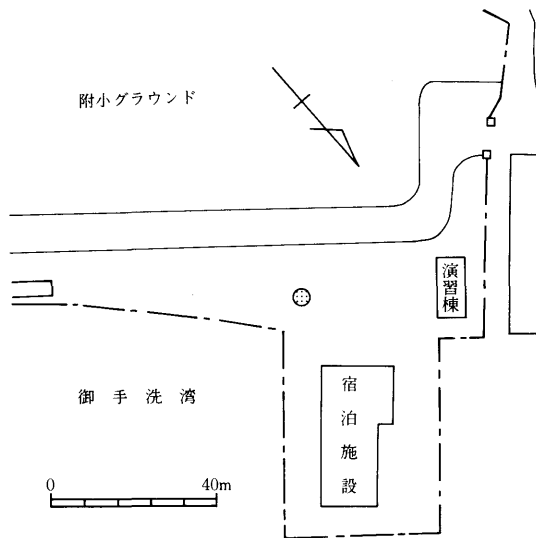


Fig. 18 調査区位置図

土師器 (1～14)

1は坏。底部と体部の境に稜をもち、底部側面は高台状に立ち上がる。糸切り底。2は坏もしくは皿で、底部と体部の境に不明瞭な稜をもつ。3・4は皿。体部は直線的に短く外傾し、口縁端部は尖る。4は薄手で、体部は内弯してゆるやかに開き、口縁端部は尖る。5～7は碗。高台は低く、断面三角形のもの(5・6)と台形のもの(7)とがある。5は外開きの高台をもち、外底面は糸切りののち横ナデ。8～12は台付皿。8は口縁部で、端部でやや内巻きぎみになる。9～12は

光構内の立会調査

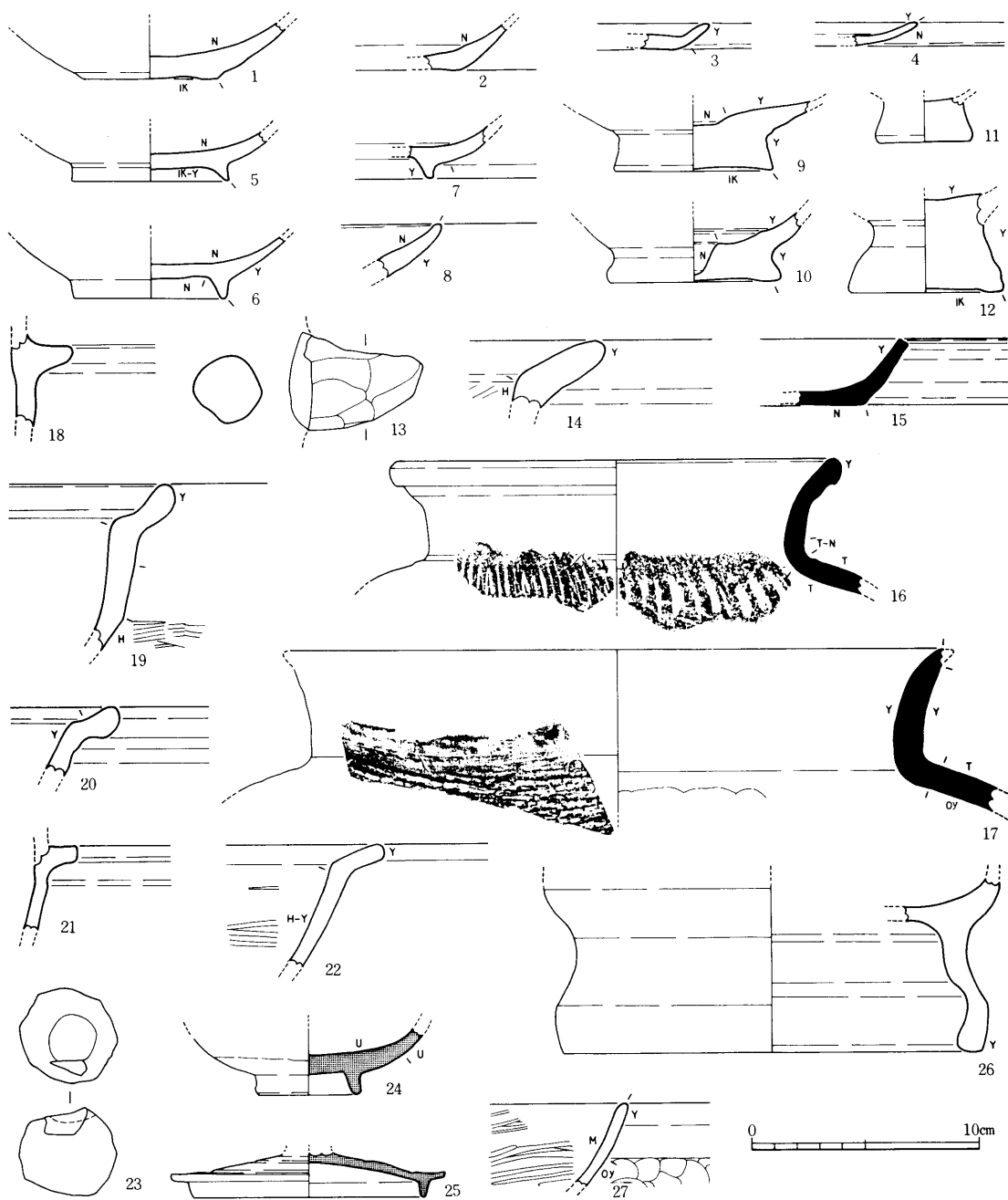


Fig. 19 御手洗湾採集遺物実測図

昭和63年度山口大学構内の立会調査

Tab. 3 御手洗湾採集遺物観察表

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	法量 () は復原値				
				胎土	焼成	備考		
1	土師器 坏	② 6.0	①暗赤褐色 (2.5YR3/2) ②浅黄色 (2.5Y7/3)	良	好	良	好	
2	土師器 坏or皿		灰白色 (5Y7/2)	良	好	良	好	
3	土師器 皿		灰白色(2.5Y8/2)	不	良	良	好	
4	土師器 皿		①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精	良	良	好	
5	土師器 碗	② 7.0	浅黄色 (5Y8/3)	良	好	良	好	
6	土師器 碗	② 6.8	灰白色 (2.5Y8/2)	やや不良		良	好	
7	土師器 碗		浅黄色 (2.5Y8/3)	精	良	良	好	
8	土師器 台付皿		①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい黄橙色 (10YR6/3)	不	良	やや不良		
9	土師器 台付皿	② 7.2	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精	良	良	好	
10	土師器 台付皿	② 7.5	①にぶい褐色 (7.5YR5/3) ②にぶい橙色 (5YR6/4)	不	良	良	好	
11	土師器 台付皿	② 4.0	①浅黄色 (2.5Y7/3) ②にぶい橙色 (2.5Y6/2)	良	好	良	好	
12	土師器 台付皿	② 6.8	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良	好	良	好	
13	土師器 甌		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	不	良	良	好	
14	土師器 甕		①にぶい褐色 (7.5YR6/3) ②にぶい褐色 (7.5YR5/3)	不	良	良	好	
15	須恵器 坏身		①灰白色 (10Y7/1) ②白色 (7.5Y6/1)	不	良	やや不良		
16	須恵器 甕	①(19.4)	①にぶい褐色 (7.5YR5/3) ②灰白色 (2.5Y8/2)	やや不良		良	好	
17	須恵器 甕	①(29.0)	①明褐色 (7.5YR6/5) ②灰白色 (N7/10)	精	良	良	好	
18	土師質土器 鍋		①褐色 (10YR5/1) ②褐色 (10YR4/1)	不	良	良	好	
19	土師質土器 鍋		にぶい橙色 (5YR7/3)	良	好	良	好	
20	土師質土器 鍋		①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい橙色 (5YR6/3)	良	好	良	好	
21	土師質土器 鍋		①浅黄色 (2.5Y7/3) ②浅黄橙色 (5Y7/3)	やや不良		良	好	
22	土師質土器 鍋		①にぶい褐色 (5YR6/4) ②赤色 (10YR5/6)	良	好	不	良	
23	土師質土器 土錘		赤褐色 (2.5YR4/6)	良	好	良	好	
24	陶器 碗	② 4.4	素地-にぶい赤褐色(2.5YR5/3) 釉調-緑灰色 (7.5GY6/1)	良	好	良	好	肥前系
25	陶器 蓋	① 10.2 ③ 2.0	素地-オリーブ灰色 (10Y4/2)	良	好	良	好	体部に2条の圈線
26	瓦質土器 壺	②(18.4)	①灰白色 (10Y6/1) ②暗灰色 (N3/0)	良	好	良	好	和泉型
27	瓦器 碗		①暗灰色 (N3/0) ②灰白色 (5Y8/1)	良	好	良	好	

総高台の底部で、高台の高さ、底径には各種ある。9・10は内面中央部を強いナデによって窪ませる。13は甌の把手。14は甕で、頸部内面に鈍い稜をもち、厚手の口縁部は直線的に短く開く。口縁端部は丸い。

須恵器 (15~17)

15は坏身。体部は直線的に短く開き、口縁端部は窪む。16・17は甕。口縁部が外弯して開き、16は口縁端部が肥厚する。

土師質土器 (18～23)

18～22は鍋。18・21は体部外面に短い鏝部をもつ。19・20は口縁部が内弯して短く外方に屈曲し、頸部外面と口縁部内面下半を強く横ナデして端部を肥厚させる。22は直線的に短く「く」の字に開く口縁部をもつ。23は球形の土錘で、上下両端中央部を窪ませる。

陶器 (24・25)

24は直立ぎみの削り出し高台をもつ小形の碗で、体部下半から外底面は無施釉。肥前系。25は蓋で、撮み部を欠損する。天井部から体部にゆるやかに下降し、口縁部は水平に開く。体部には2条の圈線が巡る。

瓦質土器 (26)

壺の脚部で、直立ぎみに立ち上がり、上半部で屈曲して外弯しながら内傾する。

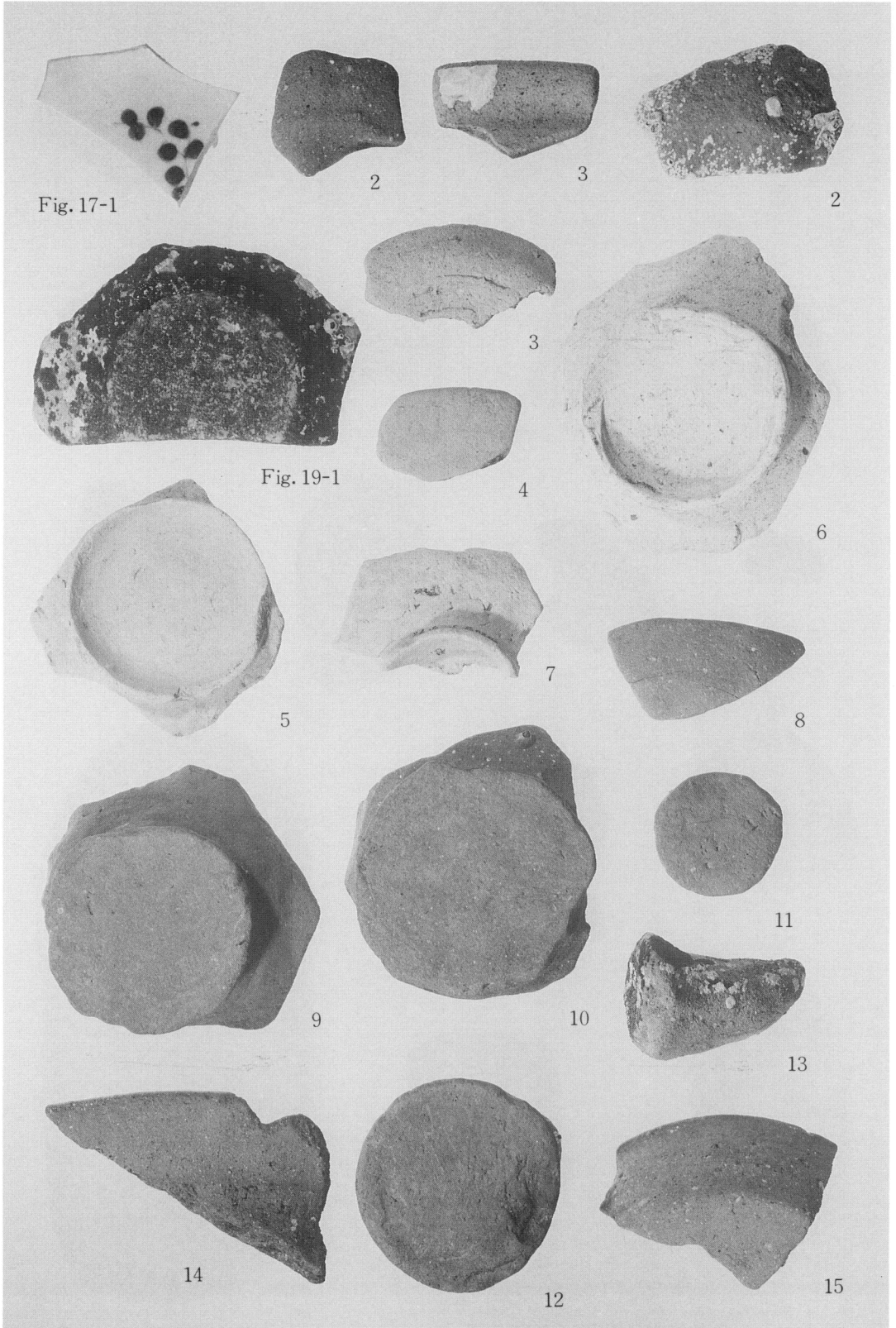
瓦器 (27)

和泉型の瓦器碗で、内弯して立ち上がる体部の内面は粗雑なヘラミガキ、外面上半は横ナデ、下半は指オサエされる。口縁端部は丸い。

(河村)

[注]

- 1) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。



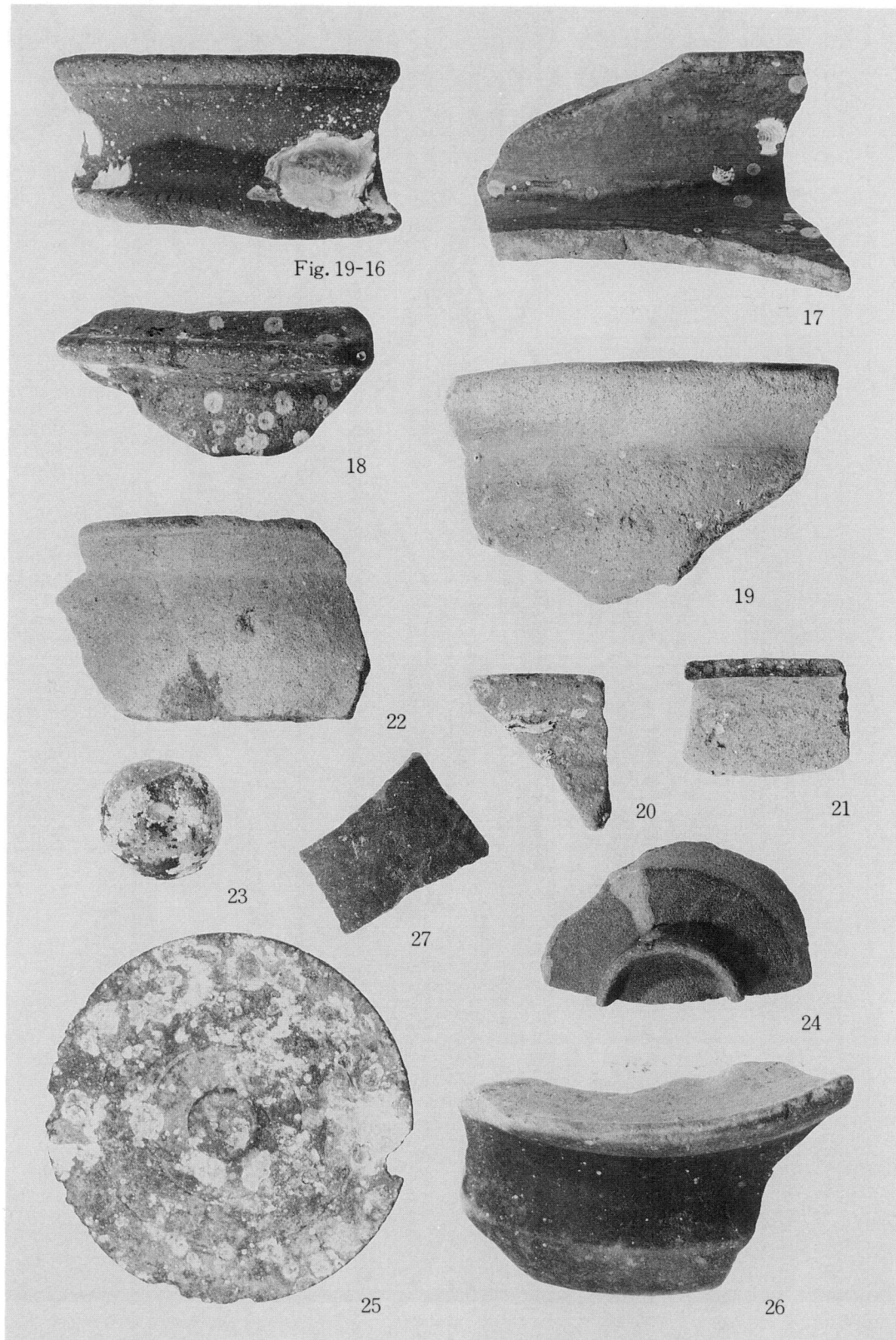


Fig. 19-16

17

18

19

22

20

21

23

27

24

25

26